

板倉雅宣

タイポグラフィ論攷

朗文堂

本木昌造の呼称

本木昌造 長崎ゆかりの地

『學問のすゝめ』活字版

グーテンベルグが作った活字の高さをめぐって

ギャンブルがつくった日本語かな活字

マージナルゾーンの語源を探る

「史料」中国の母型と活字に関するホフマンの報告 日本語訳

「本木昌造の呼称」は、「もとき」か「もとき」かという問いかけにこだわって、調べたもので、長崎歴史文化博物館、神戸市立博物館、江戸東京博物館、長崎史談会等々、イサベル・ファン・ダーレン女史にも声をかけて本木昌造の自筆欧文サインの発見に協力をいただいた。本木昌造の祖父の代までは「もとき」のサインがみつきり、親の代から「もとき」と名乗っていることがわかったという記録です。

「本木昌造 長崎ゆかりの地」は、二〇〇九年に、タイポグラフィ学会の本木昌造賞を戴いた時に会場で配布したもので、二〇〇三年九月に朗文堂の片塩二郎氏と長崎を訪ねたときに巡ったときの写真を添えてあります。この時のメダルには「もとき」と刻印されています。

『「学問のすゝめ」活字版』は東書文庫に全冊が収蔵されているのと、同じく東書文庫に所蔵されている『文部省雑誌 第一号』（明治七年一月刊）と『学問のすゝめ』初版の活字版の活字サイズが同じであることから、調べ始めたことです。福沢諭吉と親交のあった芝神明前の尚古堂の岡田屋嘉七が関係したかもしれません。

「ギャンブルが作った日本語かな活字」は明治年に日本政府から要請を受けて上海美華書館のウイリアム・ギャンブルが鑄造活字の製法を本木昌造に伝授しました。フルベッキとヘボンのやりとりが興味深いと思われます。美華書館のウイリアム・ギャンブルを招聘した経緯は後藤吉郎氏が「長老派教会歴史協会」で「アメリカ・プレスビテリアン教会・海外伝道会記録」のマイクロフィルムを調査されていますが、一部を公表されていますが、詳細は不明です。日本政府から\$5,000を受け取ったかという記録が公開されるのを楽しみにしています。

「グーテンベルクがつくった日本語かな活字」は慶応義塾大学が購入した四十二行聖書を復刻して、二〇〇四年に公開シポジウム「よみがえるグーテンベルク聖書」で展示した。これは印刷博物館でも企画され、別のかたちで公開された。もともとグーテンベルクの活字は現存しておらず、活字の高さはわからなかった。活字を鑄造したテオ・レハクは活字の高さを0.928mmとしたという。この印刷物はミズノ・プリンティング・ミュージアムに収蔵してある。昔の史料を調べ、昔はどのような活字の高さだったのだろうかを調べました。

「マージナルゾーンの語源を探る」は戦後、「マージナルゾーン」ということが現れて活版印刷の決め手となる特徴として知られるようになり、語源を探ると相原次郎が最初に使ったということがわかりました。

「史料」中国の母型と活字に関するホフマンの報告 日本語訳」はオランダの東洋学者が日本の事情を知るために、ぜひ日本語の活字が欲しいということで、長崎に試作を依頼したが、出来上がったものは拙劣なものであったため、中国の四号活字の母型と活字を購入することになりました。その経緯を述べた「ホフマンの報告」を日本語訳にしたもの。

著者『まえがき』より

タイポグラフィ論攷

著者：板倉雅宣

発行：二〇一七年六月一九日

定価：本体二〇〇〇円＋税（B5判 並製本 図版多数 一二二頁）

ISBN978-4-947613-94-3 C1070

朗文堂 営業部：二六〇一〇〇三二 新宿区新宿二一四一九

Telephone 〇三―三三三―五二一五〇七〇

Facsimile 〇三―三三三―五二一五一六〇

http://www.ops.dti.ne.jp/~robundo robundo@ops.dti.ne.jp

